

## 腑に落ちる米国の思想的背景

映画通をもつて任ずる方なら、「エルマー・ガントリー」という映画を知っておられよう。パート・ランカスターが

1960年度アカデミー賞で主演男優賞を獲得した名作である。ランカスターが見事に演じたのは、民衆に回心を促す女性巡回説教家に憧れ、彼女のそばにいたいばかりに、自らも伝道師となり、セールスマンとしての才能を駆使して伝道集会をショー・ビジネス化していく、矛盾と魅力に満ちた男。この人物のモデルは、20世紀初頭の大衆伝道師ビリー・サンデーである。

極貧の家に生まれ、野球選手から破天荒なパフォーマン

ス売りにする福音伝道師に転身、実業家や大統領にまで一目おかれるようになったサンデーは、高等教育を一切受けていなかった。彼が体現したものが、「ハーバード主義、イエール主義、プリンストン主義」への異議申し立てとしての反知性主義である。

この本は、キリスト教のアメリカへの土着化のプロセスを、宿主に影響を及ぼし、自分自身をも変化させていくウィルスの感染にたとえながら、歴史の中に立ち現れたサンデーたち反知性主義のヒーローを活写し、その肯定的な側面に光を当てる。知性主義の拠点プリンストン大学での

教授経験もあり、アメリカとアジアの神学に精通した森本あんり氏ならではの視点から書かれた簡約アメリカキリスト教通史である。ホーフスタッターの名著「アメリカの反知性主義」を読み砕いて解説してくれる入門書とも言える。

読み進めるうち、最先端科学とキリスト教原理主義を同時に抱え込む謎の国、世俗的成功に拘泥しながら、不思議なほど宗教的で、底抜けにポジティブなアメリカの思想的背景がすとんと腑に落ちるだろう。そして、日本の反知性主義に触れるあとがきにたどり着くと、キリスト教の信仰復興の伝統の中



で、反権力、反権威として出現したアメリカの反知性主義の根っこ、いま、身近に広がる異文化への無関心、インターネット上や街頭で剥き出しにされる黒々とした敵意としての日本版反知性主義の根っこは、かなり異質なものだと思に至るに違いない。

(新潮選書、1404円)

著者は1956年、神奈川県生まれ。国際基督教大学副学部長。著書に「アメリカ・キリスト教史」など。